中大スポーツ
CHUDAI SPORTS
4月1日　火曜日
令和7年（2025）
第188号
中央大学体育連盟機関紙
発行人　志水　恒太
編集人　関　拓斗
八王子市東中野742−1
電　話　042(674)2802

らーめん
にんにくや

Instagram: ninnikuyaseki
twitter: ninnikuya_h
応援してるぞ〜!!

◆氷上の軌跡◆　中央大学アイスホッケー部の公式ブログに卒業生が思いをつづる連載『氷上の軌跡』がございますので、ぜひご覧下さい

↑中スポWEBはこちらから

インカレ9年ぶり4度目

アイホ制覇

中スポ
陸上大和2世〈2面〉
髙橋&藤本中大へ〈3面〉
新人記者募集〈7面〉
スキー中澤連覇〈8面〉

優勝　中大

8　3
6　1　　3　4
中大　関大　法大　明大

切り込み写真㊨は喜びを体現する川合㊦は存在感を見せた種市

種市最優秀選手賞

主将兼エースである種市が最優秀選手賞に選ばれた。エースとして今大会出場した全試合で得点を挙げ、主将としてチームを一番に鼓舞し、圧倒的な存在感を見せた彼は「やるべきことをやるだけ」と東洋大戦後では頼もしい言葉も語った。持ち前の力強いプレーでチームを引っ張り、続く試合も誰もが彼に注目しようとしていた。しかし、準決勝第1ピリオド、選手同士の接触により負傷し、決勝戦出場は叶わなくなってしまう。チームの要の欠場は大打撃となったが、彼はチームメイトを信じて声をかけ、鼓舞し続けた。それに応えるように決勝戦でも選手たちは全力でプレーをし、見事優勝を決めた。プレーの面でもチームの精神面でも大きな役割を果たした種市こそ、最優秀選手賞に一番ふさわしいだろう。

表彰後に満面の笑みを見せた集合写真〈カメラ・塚越香都〉

スケート部

◆第97回日本学生氷上競技選手権大会ファーストディビジョン（12・24〜29　青森・テクノルアイスパーク八戸他）

秋リーグ王者東洋大、昨年のインカレで苦杯を喫（きっ）した関大、宿敵の明大が目の前に立ちふさがった。しかし、中大は強敵たちを次々に打ち倒し、9年ぶり4度目となるインカレ優勝の栄冠を手にした。

一番の大勝負

準々決勝の相手は昨年のインカレ優勝校の東洋大。中大は秋リーグで2敗を喫（きっ）していたが、「負ける気がしなかった」と八戸監督が語ったように士気は上々だった。夏野晃輔（令7卒）が絶対の自信を持つ堤虎太朗（総4）、角丸陸斗（国経4）との連携から先制点を挙げる。攻めの姿勢と川合温大（文4）の好セーブで試合を有利に進め、夏野が不安を抱いていた「自分が先制点を挙げると負ける」というジンクスを覆した。

因縁の関大戦

東洋大との熱戦から一夜明け、興奮冷めやらぬ様子で迎えた準決勝。昨年のインカレ準決勝で敗れた因縁の相手である関大と、再び相まみえることになった。試合開始16分、中大の大黒柱、種市悠人主将（令7卒）が負傷しリンクを去った。さらに、関大に先制点を許しピンチに陥った。このピンチを救ったのはポイントゲッター堤。「チームのために」（堤）という思いを胸に、見事なスティックさばきで連続得点を挙げる。堤の活躍で息を吹き返した中大は、高崎泰成（総3）、小岩獅竜（商2）、夏野がたたみかけるようにシュートを決め、一気に5点差に。中大はリードを守り切り、リベンジを果たした。

最高の仲間と

最高の仲間たちと共に戦う最後の公式戦。相手は秋リーグで一勝一敗と互角の力を持つ明大。中大は引き続き種市を欠いたまま決勝に臨んだ。試合開始直後から両チームパックを激しく取り合う。先制点を奪ったのは中大。優勝を強く望んでいた堤がその執念でパックを叩きこんだ。続く第2ピリオドも果敢にゴールを狙って行く。角丸、そしてこれまでディフェンスの要として活躍してきた縁の下の力持ち、大野将輝（令7卒）が得点し明大を突き放す。途中、明大の押せ押せムードを夏野が断ち切ると、第3ピリオドでは辻崇太郎（経3）、小岩が得点を重ねる。藤間航哉（経4）がダメ押しの1点を決め、勝利を確実にした。「5、4、3、2、1」観客席からカウントダウンが始まり、とうとう試合終了のブザーが鳴った。

氷上の王者へ

氷上の王者となり、それぞれの防具を放り投げ抱き合う選手たち。満面の笑みを浮かべる者も、思わず涙をこぼしている者も、お互いがお互いのために削った体をいたわった。試合後、「最高です」と喜びの言葉を口々にした4年生。今大会での優勝が彼らの今後を照らす光となり、4年生の勇姿が連覇を目指す後輩たちの道しるべになるだろう。（福田菜緒）

▼大会結果▼❶中大②明大③法大

ベスト6に5人選出!!

ベスト6に攻撃陣から堤、角丸、夏野の3人、守備陣からは川合、大野の計5人が選出された。攻撃の中心を担った3人の連携について夏野は「意思疎通ができていて、3人の動きが連動しすぎて完璧」と語り、個人賞について堤は「個人賞はみんなで取ったものだと思っているので、みんなで喜びたい」とチームメイトへの思いを語った。守備でチームに貢献した大野は「みんなと過ごす寮生活が一番思い出で、たくさん遊んだし、話し合いもしたし、みんなで常に一緒にいたからそれが思い出」とチームで過ごした4年間を振り返った。好セーブを連発した川合は「今年の4年生は本当に尊敬できる部分がいろいろあって、来年は守り中心のチームになっていくので、チームでもっと知識を固めて、インカレ連覇に向けて前進していきたい」と来年を見据えた。攻撃陣の一角を担い、来季主将の角丸は「ラインメイト、（夏野）晃輔さんや（堤）こたさんのおかげが大きいので、本当に二人には感謝しかないし、一緒にホッケーできて嬉しかった」と先輩への感謝を語った。

㊤左から角丸、夏野、堤
㊦左から成瀬（明大）川合、大野

Center Position

「その出会いは偶然ではない」「君が出会いたかったから」。とある授業のレジュメで目にしたフレーズが直感的に思い当たったのは、中スポでのさまざまな出会いだった。あの夏、テレビ越しの甲子園で見ていた憧れの選手も、スキーが盛んな地元のスター選手も、私が思い悩む度に手を差し伸べてくれる同期も、中スポに入らなければ関わることはなかったのかもしれない▼今思えば、それらを巡り合わせてくれた中スポとの出会いも運命的だったように感じる。入学して早々の健康診断の後、特に目当てもなく茗荷谷キャンパスの新歓ブースに立ち寄った。2年前の4月号に目を奪われたかつての私は数か月後、4月号で1面を飾っていた選手に記者としてインタビューをしていた▼中スポに入り、夢中で奔走してきたこの2年間、選手の秘めた想いや影の努力に何度も触れてきた。選手の涙や笑顔をファインダー越しに目にしてきた。まだまだ文章は稚拙だが、一途に努力を積み重ねる選手と、それを全力で伝えようとする中スポ部員たちに何度も刺激をもらってきた▼中スポは箱根駅伝取材を最後に1月号で引退するのが慣例だ。大学生活は折り返しだが、学生記者として中大アスリートを追いかけられる時間はもう1年もない。残された日々を全力で駆け抜けたいと思うと同時に、中大を背負って戦う選手の活躍をもっと伝えたいとも思う。そして期待と不安が入り混じる中、中スポを引っ張っていこうと奮起する同期に今度は私が何かを返したい▼「この出会いが偶然ではない」ならば、「私が出会いたかったから」、中スポと、あの選手と、そして部員のみんなと出会えたならば、本当に幸せなことだ。そして2年前の私のように中スポと「出会い」、刺激的な青い春を踏み出そうとする新入生のみなさんを中スポ一同、心からお待ちしています。（齊藤）

レイアウト　塚越香都